

## 怠惰な学習者の些細な現代ギリシア語体験

## — 両ギリシア語学習歴とともに —

江田 雅一

私は可也の変わり者である、と見られている。複数の外国語を習得しようとして時間と労力をかけては挫折し、目標の段階に達したら達したですぐに滑り落ちる。何だかあるギリシア神話のような不条理？を身をもって体験しているのではないかとしばしば思う。複数の言語に関わるのは変わり者だと言った作家の島田雅彦は的を得ている。私は変わり者なのだ。自分の脳（能ではなく）力？不足を自覚しながら、実利的な利得など殆どない外国語の学習（尤も、各会員方のように卓越した外国語の運用力を身につけた方には当てはまらない）に何故こうも惹かれるのか。書店へ行けば行っただけで止せば良いのに外国語の棚へ目が行く（但し、英語以外）。何分田舎住まいの為、都会の大きな書店に行くとも最低数時間は書店で過ごす。一日居ても飽きない。書店は私にとっては知の遊園地みたいなものだ。単純に楽しいのである。外国語のコーナーでは様々な言語の入門書を手にとってみたり、眺めたりする。同じ言語の入門書を比較すると、項目の並べ方の違いなどもあって面白いと感じる。そんな事を繰り返していると、必ず数月に一回は「やってみようかな」と思う言語が出てくる。過去そうやって成果を挙げた言語はほぼ皆無。残念な事にその経歴の中に今のところ含まれてしまうのが両ギリシア語である。

現代ギリシア語。この名称が「古典ギリシア語」の対であることは周知の事実であることは言うまでもない。それにしても一つの言語変化の経緯として「古典」と「現代」と区別される言語があるのは珍しいのではないだろうか。英語には「古英語」「中世英語」と言う区分があるが、それくらいのものだろうか。「古典フランス語」「古典スペイン語」などと言う名称はないし、ラテン語を「古典イタリア語」と言うこともない。単に「～語」と言葉の前に国名や民族名等が付くのが通常の表記である。このことはギリシアという国が抱えた言語変化の豊かさ（複雑さ？）を物語ると共に二つの「ギリシア語」という財産の大きさを感じさせてくれる。勿論、その中には歴史的、政治的な断絶や混乱も含むのだろうけれど。

さて、私のギリシア語学習歴と言えれば惨憺たるもので、よくこれで学会員に

名を連ねているものだと、幾多の諸会員の方々から非難されても仕方ないほどと言えよう。現代ギリシア語は3年前に修士終了の直前から『現代ギリシア語の入門』（白水社刊・荒木英世著）を始めたが、18課で一旦終了となった。現代ギリシア語を学ぼうと思ったのは、文字への興味が最初であった。福田千津子著『現代ギリシア語を書いてみよう読んでみよう』（白水社刊）でギリシア文字を覚えてからアテネへ行ってみたいと思ったり、現代文学の短編集を1冊で良いから読破したいなどと考えもした。一方、古典「ギリシア語」という栄光ある言語では幾多の文学作品が創られていることが認知されている。それに引き換え、比較的ヨーロッパ諸語は日本でも認知度が高いにも関わらず「現代ギリシア語」はテキストも少なく、あまつさえ「現代文学」作品の翻訳すら殆ど一般的に日本に紹介されていないという現状である。英語での翻訳も私の知る限り見た事がない（ドイツ語版はレクラム文庫で幾らかあるようだが）。この理由は何故なのだろうという疑問からこの言語に取り組んでみた、というのが実情であった。私は大学院時代にはドイツ語とロシア語を第2・3外国語として学んでいた。前者は兎も角、後者の存在感は随分薄いと感じていたが、「現代ギリシア語」の扱いに比べたら何と破格の扱いであることだろう。ロシア語は「大言語」なのだ。数が少ないとはいえ現代文学作品の翻訳（日・英）も比較的容易に手に入りやすい。言語・文学の認知度も日本ではかなり高いほうだ。また、「古典」ギリシア語の栄光に比べるとなんと「現代ギリシア語」の環境は慎ましい存在だ。最近ではアラビア語やアジア諸語等の言語群が存在感をより強めている。「大言語」であったかつての古典「ギリシア語」に比べると落差は流石に否めない。魅力的な現代文学作品がないわけではないだろう。「現代ギリシア語」の市場流通度の少なさを改善する上で、諸先生方の尽力が一層必要だと感じる。

因みに私は今夏古典ギリシア語にも挑戦してみた。丁度運悪く(?)ラテン語の入門書(同じく白水社刊行物)を終えて、問題集に入ろうとしていたころである。教養としてラテン語以外に古典ギリシア語の基礎を知っておくのも良いだろうと思ってつい『エクスプレス古典ギリシア語(CD付き)』購入。文学作品や原文が全て例文に使われていることに惹かれてしまったのだ。結果今のところ第4課で止まっている。継続の見込みは十分にあると考えているのだが、現在他言語を学習中の為終わるまでは再開の予定がない。決して両ギリシア語とも相性が悪いとは思えないのだが(それこそえ単なる思い込みかもしれないが)、先に進んでない。自らの能力不足(継続しないのも能力の内である)を悲しみ、落ち込んだときには筑摩文庫『私の外国語学習法』(ロンブ・カトー著/米原麻里訳)を読んで自らを慰めることにしている。「どんな外国語でも下手に学んだことすら無駄にならない」というような一節があり、私のような無能者

に僅かながら安らぎを与えてくれる。そしてこの一節がまさかアデレードでの体験を裏書するものとは予想だにしていなかったけれど。

2003年10月に友人とオーストラリアを旅行することになった。日程やフライトの都合もあり、シドニーかメルボルンに行くはずが、アデレードになった。私は別にどの都市であろうと深く考えていなかった。海外旅行へ最近殆ど行ってなかったので偶には南半球というのも良いだろうということであった。アデレードは（というよりオーストラリア自体が）移民の町であるということガイドブックで読んでいたので、もしかすると英語以外の言語（ドイツ語）を使えるかもしれない、などと考えていた。アデレード自体ドイツ語で元来「貴婦人」を表す語なので、ドイツ語を使えるケースもあるのではとも思った。果たしてその通りになった。ワイナリー巡りのツアーでアデレード大学に通う娘さんを持つ夫妻とドイツ語で話すこととなった。このときにはまさか現代ギリシア語を使う機会に恵まれるなどとは思っても寄らなかつた。しかし、その時は案外早くやってきた。

アデレードの治安は良く、酔っ払いの学生が騒いでいることがあったが、夜間外出しても問題は全くなかつた。到着2日後に市内を歩いていると、友人が話し掛けてきた。「リロスって食べ物の看板あるけどなんだろうな」。その台詞に私の脳がなぜか瞬時に反応した。当の看板を眺めて見るとその「リロス」の「リ」つまり英語表記での「r」に似た文字は詰まるどころγ（ゲー）であったのだ。いつかは「ギロス」を食べようという食い意地を心の片隅に残しておいたのが良かったのか、ギリシア語の発見に繋がったのである。私はやや興奮気味に友人にその意味するところを説明した。「あの文字はギリシア語ではgの音。だからあれはギロスというんだ。ギリシア語だよ」。この友人には以前私が両ギリシア語を勉強したことがあるとの話をしていたので、なるほどという顔つきになった。友人にこの店に後に寄ってギロスを買おうと誘い、夕食後満腹にも関わらずその店へ寄ってギロスを購入した。そのときに通じた「エフハリストー」が妙に嬉しかった。たったこれだけのことで嬉しくなるのだから私が如何に単純な性格の持ち主であるかお解り頂けると思う。この時に買ったギロスも美味しかった。ただ残念なのはほぼ満腹状態でギロスを食べた為、ほぼ半分残った時点で大食漢の友人に譲らなければいけなかつたことである。

2度目の「会話」は、アデレードを去る前日にオパールショップで買い物をする事になった。アデレードはオパールの原産地である。オーストラリア自体全生産量の95%を占める。アデレードは原産地ということもあり、中間マージンが少ない為に安く買えるのだ。私と友人はその店に入りオパールの質の説明を受け、感心しきりだった。販売員である初老の貴婦人も愛想が良く、気が付けば一番安いクラスのオパール装飾品を予定外にもかかわらず購入してい

た。その後でだろうか、なにやら雑談を英語でしているうちに、その婦人がギリシア出身であり、娘さんの旦那がギリシア本国で会計士をしているということであった。そこで、遂に彼女にギリシア語学習歴がある旨を言うと、自分が覚えているギリシア語のフレーズを片っ端から言ってみた。今思えば、発音も拙い異国人の「ありきたりの」ギリシア語フレーズを聞かされた婦人はさぞかし迷惑だったかもしれない。それでも笑顔で「発音が良いわね」と言ってくれた。其れだけで「下手に覚えた外国語」も無駄ではなかったと思えるのである。

このギロスとオパールのお店での「ギリシア語」体験は殆どの外国語学習者が体験したような些細なことかも知れない。しかし、案外この「些細な」楽しい経験が外国語の学習を続けさせる大きな要因にもなると思う。多分又近いうちにこの「怠惰な学習者」は両ギリシア語の学習を再び始める事になるのではないかと感じている。外国語をやるにはお金がかかる。そしてある程度両ギリシア語が習得出来たらテキスト代ぐらいは取り返したいという希望は持っている。抒情性豊かな（と思い込んでいる）言語の文学を読み、その言語で書くことが出来る諸先生方には感服する。それと同時に羨ましいという随分と自分勝手な嫉妬を危うくしそうになりつつある。過去と現在を行き来する両ギリシア語。その文学作品の一つでも理解できるようになれたなら、投資額を回収した気分になれるような気がしている。何時の日になるかは知れないけれど。何語であれ、言語を一定レベルで習得するためには労力と時間がかかる。私も様々な言語に手を出しては挫折し、多少なりとも成果があったのは数言語に過ぎない。これらすらややもすれば「カドメイアの勝利」かもしれない。世間一般からみれば飽く無き（徒労に近い？）努力と思える行為を続けていこうと思っている私はかなり例外的な人間であろう。そのような人間でも不断の努力で到達出来る場所がある、その場所を提供してくれるのが外国語であったのだ（と信じているに過ぎないが）。子供の頃から劣等生であった私が唯一クラスの中で秀でることが出来たのが「外国語」という教科であったのだ。思えば幼稚な思考ではあるが、そんな想いが私から離れない。そうでなければこれほどまでに外国語や文学に興味を惹かれることはなかったはずだ。その場所に居続ける為に私は何かしらの言語を学びつつけていくことだろう。そして両ギリシア語もきっと再開出来るものと根拠もなく信じている。

※参考文献『ギリシア・ローマ名言集』（柳沼重剛編・岩波文庫）22p  
『ヒコクミン入門』（島田雅彦著・角川文庫）